

## 現代青年における“ふれ合い恐怖的心性”と抑うつおよび自我同一性との関連<sup>1)</sup>

伊 藤 亮      村 瀬 聡 美      吉 住 隆 弘      村 上 隆

名古屋大学大学院  
教育発達科学研究科

名古屋大学  
発達心理精神科学  
教育研究センター

名古屋大学大学院  
教育発達科学研究科

中京大学社会学部

本研究の目的は現代青年のふれ合い恐怖的心性の精神的健康度について、抑うつと自我同一性の側面から検討することであった。大学生 292 名（男性 125 名，女性 167 名）を対象に質問紙調査を実施し，対人退却傾向，対人恐怖的心性，抑うつ，自我同一性の感覚を測定した。対人退却傾向と対人恐怖的心性の高低の組み合わせによって対象者をふれ合い恐怖的心性群，対人恐怖的心性群，退却・恐怖低群の 3 群に分類した。一元配置分散分析の結果，ふれ合い恐怖的心性群は対人恐怖的心性群より抑うつは低く，自我同一性の感覚は高いことが示された。一方，退却・恐怖低群と比較した場合，自己斉一性・連続性，対他的同一性の感覚は低いことが示された。これらの結果から，ふれ合い恐怖的心性群は対人恐怖的心性群よりも精神的には健康的な群ではあるが，個として他者と向き合う対人関係においては自我同一性の危機が生じやすい一群であることが示唆された。

キーワード：ふれ合い恐怖的心性，対人恐怖的心性，抑うつ，自我同一性

### 問題と目的

一般青年においては，他者の目が気になる，人前で過度に緊張するなどの対人恐怖的心性が広くみられるといわれている（永井，1994）。永井（1994）によれば，青年期では自己意識や他者意識が高まり，その結果として対人恐怖的心性が高まると指摘されている。しかし，近年，自己や他者に対する関心が低い“ふれ合い恐怖的心性”という青年期心性が報告されてきている（岡田，1993，

2002）。

ふれ合い恐怖的心性とは，“ふれ合い恐怖症”に似た一般の健常青年にみられる心理的傾向である（岡田，1993，2002）。“ふれ合い恐怖症”は，元々学生相談など心理臨床の場で見出された病態の一つである。山田・安東・宮川・奥田（1987）によれば，ふれ合い恐怖症とは，赤面恐怖や視線恐怖などの対人恐怖症にみられる身体的主題を訴えず，会食・雑談場面などの人間関係が深まる場になると不安を生じる病態であり，“ふれ合いの場での対人恐怖”とされている。佐藤・野上（1985）も，従来取り上げられなかったタイプの対人恐怖症として会食恐怖症を挙げており，会食の場以外の対人接触では障害を自覚しないという“ふれ合い恐怖症”と類似の症状を報告している。また，福井（2001，2003）においても，ふれ合い恐怖は対人恐怖らしからぬ対人恐怖の一亜型であるとされ

1) 本論文は，第一著者が 2004 年度に名古屋大学教育学部に提出した卒業論文を再分析し，加筆・修正したものである。また，本論文の内容は，第 46 回日本児童青年精神医学会総会において発表された。本論文作成にあたり，ご指導を賜りました名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター准教授金子一史先生に深く感謝いたします。

ている。山田他(1987)は、ふれ合い恐怖症者の特徴として、学業や機械的な関わりなどの浅い人間関係は上手にこなすことができるが、自力では情緒的な深いつき合いができないことを指摘している。さらに山田(1989)では、ふれ合い恐怖症者は、日常生活で困難を生じることは少なく、治療対象となし難いものが多いが、ふれ合い恐怖症者の周りの者は、ふれ合い恐怖症者に困惑を感じることが多いとされている。そのため、ふれ合い恐怖症は“サブクリニカルな問題性格群”の一つであるとされている(山田, 1989)。

岡田(1993)は、対人恐怖的心性との比較を通して、“ふれ合い恐怖的心性”が一般の青年に広くみられることを報告している。岡田(1993)は、ふれ合い恐怖的心性の高い群では、自省傾向が乏しく友人関係を回避する傾向にあり、対人恐怖的心性が低いという特徴がみられることを見出し、ふれ合い恐怖的心性は対人恐怖的心性と共通する部分がありながらも、区別される心性であると指摘している。岡田(2002)や清水・海塚(2002)でも、ふれ合い恐怖的心性の高い青年が一定数存在することが確認されている。

このように、ふれ合い恐怖的心性は、心理臨床の場で報告された“ふれ合い恐怖症”というサブクリニカルなレベルの病態を背景に提唱され、一般青年に広く見られる心理的傾向であると報告されてきている。しかし、青年期心性としてのふれ合い恐怖的心性について、精神的健康度という観点から多数のデータを用いて実証的に検討している研究はみられない。ふれ合い恐怖的心性の精神的健康度を検討することで、青年期心性の理解に新たな知見が得られること、さらにはふれ合い恐怖的心性の高い者に対する対人場面での援助への示唆を得ることができることが期待される。そこで本研究では、一般青年にみられるふれ合い恐怖的心性の精神的健康度を検討するために、抑うつと自我同一性を取り上げることとした。

第1に、抑うつについてであるが、抑うつは誰

にでも生じるものであり、精神的不健康の指標の一つとされている。抑うつの発生については様々な論があるが、その一つに自己意識理論を中心とした研究がある。Pyszczynski & Greenberg(1987)は自己意識理論を元に、否定的な出来事の後に“自己に注目すること”により否定的な感情が高まるという抑うつの自己注目スタイルによって、抑うつに至ると主張している。Pyszczynski & Greenberg(1987)の研究からは、自己意識のあり方、つまり“自己に注意が向くこと”が抑うつの発生に重要であることが示唆される。

対人恐怖的心性の高い者は抑うつが高い状態にあることが指摘されている(堀井・小川, 1997)が、これは“自己に注意が向くこと”により生じている可能性がある。対人恐怖的心性は自己や他者への関心の高まり、つまり自己意識の高まりによって生じてくるものであるが、対人恐怖的心性とは自己意識がより否定的な内容となったものであるとされている(永井, 1998)。坂本(1997)は、ネガティブな自己注目が自己に対する過度にネガティブな見方を促し、抑うつの原因となる可能性を指摘している。これらの指摘から考えれば、対人恐怖的心性の高い者は、‘自己に“否定的”な注意が向くこと’により、抑うつが高い状態にあるのではないかと考えられる。

一方、ふれ合い恐怖的心性の高い者は、自分や他人に意識を向ける傾向や自分自身の内面的不安を感知する傾向が低いとされている(岡田, 1993, 2002)。このことから考えれば、ふれ合い恐怖的心性の高い者は、“自己に注意が向く”傾向が低いために、抑うつが低いのではないかと考えられる。しかしながら、ふれ合い恐怖的心性の高い者の抑うつについては未だ十分な検討はなされていない。

第2に、自我同一性についてであるが、青年期の自我同一性は、自己の内面への強い関心と、深い親密な対人関係を通じた自己の再定義・修正を通じて確立されるといわれている(Erikson, 1959

小此木 1973)。対人恐怖的心性は前述のように自己や他者への関心の高まりにつれて生じてくる心性である。対人恐怖的心性の過度な高さは青年期における自我同一性の確立を阻害する要因となるとの指摘もあるが(谷, 1997), 一般的には対人恐怖的心性の高まりは自我発達に重要な役割を果たすとの指摘が多くされており(永井, 1987; 永井・岡田, 1987), 対人恐怖的心性は, 青年期の人格の成熟に肯定的な意味合いを持つのではないかと考えられる(清水, 2001)。

一方, ふれ合い恐怖的心性が高い者は, 内面への関心が低く, 親密な対人関係を回避する傾向にあると指摘されている(岡田, 1993, 2002)。このことから考えれば, ふれ合い恐怖的心性が高い者は, 青年期の自我同一性発達の課題である“自己の内面への強い関心”と“深い親密な対人関係”に直面しておらず, 青年期の自我同一性の確立がなされない可能性があると考えられる。少数例の検討ではあるが, 山田他(1987)や山田(1989)は, ふれ合い恐怖症者は葛藤処理能力の不全さ, 母子分離不全という“未熟さ”を抱えていると指摘している。岡田(2002)においても, ふれ合い恐怖的心性は対人恐怖的心性よりも未熟な発達段階に留まっているのではないかと推測がなされている。これらのことから考えれば, ふれ合い恐怖的心性が高い者は, 対人恐怖的心性が高い者と比較すると自我同一性の感覚が低い状態にあるのではないかと考えられる。しかしながら, ふれ合い恐怖的心性が高い者の自我同一性の感覚については未だ十分な検討はなされていない。

以上より, 本研究では一般青年を対象に, ふれ合い恐怖的心性が高い者の精神的健康度について, 抑うつと自我同一性の観点から検討を行うことを目的とした。その際, ふれ合い恐怖的心性の高い者の特徴を詳細に検討するために, 対人恐怖的心性が高い者, ふれ合い恐怖的心性も対人恐怖的心性も低い者との比較から検討を行うこととした。本研究の仮説として以下のことをあげる。

①ふれ合い恐怖的心性が高い者は, 自己の内面や他者に意識を向ける傾向が低いこと, つまり自己に注意が向く傾向が低いことから, 対人恐怖的心性が高い者と比べて日常的な抑うつが低いのではないかと考えられる。

また, ふれ合い恐怖的心性も対人恐怖的心性も低い者は, 自己に否定的な注意を向ける傾向は低いと考えられ, 抑うつは低い状態にあると考えられる。そのため, ふれ合い恐怖的心性が高い者と, ふれ合い恐怖的心性も対人恐怖的心性も低い者の日常的な抑うつは, ともに低い状態にあるのではないかと考えられる。

②ふれ合い恐怖的心性が高い者は, 親密な対人関係を回避し, 自己への関心が低い傾向にあることから, 自我同一性の確立に必要な課題に直面しておらず, 対人恐怖的心性が高い者と比べて自我同一性の感覚が低いのではないかと考えられる。

また, ふれ合い恐怖的心性も対人恐怖的心性も低い者は, 自我同一性の確立を阻害する要因が少ないため健全な自我同一性を備えていると考えられる。そのため, ふれ合い恐怖的心性が高い者は, ふれ合い恐怖的心性も対人恐怖的心性も低い者と比べても自我同一性の感覚が低いのではないかと考えられる。

## 方 法

### 調査対象者

愛知県内の2大学の大学生339名を対象に調査を実施した。そのうち, 回答に不備があったものを除き, 最終的に292名(A大学:男性125名, 女性104名; B大学:女性63名; 平均年齢19.3歳,  $S.D.=1.1$ )を分析対象とした。

### 調査時期

2004年6月から7月にかけて, 各大学で講義時間内に調査の説明を口頭で行い, 同意の得られた者に質問紙を配布し, 調査を実施した。

### 測定尺度

#### 1. ふれ合い恐怖的心性に関する尺度(対人退

**却傾向尺度)** ふれ合い恐怖的心性の測定に関して、“対人退却傾向尺度”10項目(岡田, 2002)を用いた。岡田(2002)は、ふれ合い恐怖的心性を測定するために、ふれ合い恐怖的心性に特有とされる対人的困難の特徴に関する項目を作成し、“対人退却傾向”、“関係調整不全”の2つの下位尺度からなる“ふれ合い恐怖尺度”を作成している。しかし、対人恐怖的心性との弁別的妥当性、および構成概念的妥当性が確認されたのは“対人退却傾向”のみであった(岡田, 2002)。そのため、本研究では“対人退却傾向”下位尺度のみを用いた。各項目について、“0:全くあてはまらない”から“6:非常にあてはまる”の7段階で評定を求めた。

**2. 対人恐怖的心性に関する尺度(対人関係尺度)** 対人恐怖的心性を測定する尺度として、“対人関係尺度”42項目(永井・岡田, 1987; 永井, 1994)を用いた。対人関係尺度は一般健常者における対人恐怖的心性を測定する尺度で、1. 集団にとけ込めないなど、行動面での対人恐怖的状态の度合いを示す“対人状況における行動・態度”、2. 自分が他者に悪い印象を与えたりすることを恐れるなど、対人場面での関係のあり方の困難の程度を示す“関係的自己意識”、3. 気持ちの不安定さ・劣等感や集中力の低さなど自分自身に向けられた不安定な意識の程度を示す“内省的自己意識”の3つの下位次元、各14項目からなる。永井(1994)によれば、対人恐怖的心性が高い者はこれら3つの下位次元が混在しており、得点が高い者ほど対人恐怖的心性が高いとされている。各項目について、“0:全くあてはまらない”から“6:非常にあてはまる”の7段階で評定を求めた。

**3. 抑うつに関する尺度(BDI-II)** 成人の抑うつを測定する尺度として、“ベック抑うつ質問表(Beck Depression Inventory, Second edition: BDI-II)”(Beck, Steer, & Brown, 1996)の日本語版21項目(小嶋・古川, 2003)を用いた。各質問0~3

点であり、得点が高いほど抑うつが高いと考えられている。

**4. 自我同一性に関する尺度(多次元自我同一性尺度; MEIS)** 青年期の自我同一性を測定する尺度として、谷(2001)によって作成された“多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale; MEIS)”20項目を用いた。MEISはErikson理論に基づいた青年期の自我同一性の感覚の構造を測定する尺度であり、1. 自分は自分であるという一貫性と時間的連続性を持っているという感覚を意味する“自己斉一性・連続性”、2. 自分自身が目指すものが明確に意識されているという自己意識の明確さの感覚を意味する“対自的同一性”、3. 他者から見られているであろう自分が、本来の自分自身と一致しているという感覚を意味する“対他的同一性”、4. 自分と社会との適応的な結びつきの感覚を意味する“心理社会的同一性”、の4つの下位尺度からなる。各下位尺度は各々5項目からなり、得点の高い者ほど自我同一性の感覚が高いと考えられている。各項目について、“1:全くあてはまらない”から“7:非常にあてはまる”の7段階で評定を求めた。

## 結 果

### 対人退却傾向尺度項目と対人関係尺度項目の因子分析

ふれ合い恐怖的心性が対人恐怖的心性とは異なる特徴を示すことを確認するために、対人退却傾向尺度項目と対人関係尺度項目を合わせて因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った。その結果をTable 1に示した。固有値の減衰状況などから4因子を抽出したところ、第3因子が対人退却傾向尺度の“友達数人でいる場面は苦手だ”、“大勢の友達とワイワイ騒ぐのが好きだ”という2項目を除く8項目からなっていた。この結果は、岡田(2002)の報告とほぼ一致しており、本研究でも、ふれ合い恐怖的心性(対人退却傾向尺度)は対人恐怖的心性(対人関係尺度)と弁別される因

Table 1 対人退却傾向尺度と対人関係尺度による因子分析

	原尺度	1	2	3	4	共通性
他人が自分をどのように思っているのかとても不安になってしまう	b	1.003	-.086	-.126	-.062	.755
自分が人にどう見られているのかよくよ考えてしまう	b	.969	-.077	-.140	-.115	.658
クラスや近所の人に、自分がどのように思われているのか気になる	b	.914	-.226	-.264	-.061	.505
不安が強い	c	.829	-.109	.072	.040	.672
人と会うとき自分の顔付きがきになる	b	.800	-.022	-.102	-.157	.448
他人のことがよく思えて自分がみじめになる	c	.772	-.187	.097	.039	.532
いつも何かについてよくよ考えてしまう	c	.754	-.055	.008	.078	.595
相手にイヤな感じを与えるような気がして相手の顔をうかがってしまう	b	.744	.166	-.181	-.103	.525
人と会う時に自分の顔付きや目付きがその人に悪い影響を与えるのではないかと不安になることがある	b	.733	.057	.031	-.211	.469
自分が相手にイヤな感じを与えているように思ってしまう	b	.703	.091	.112	-.049	.640
気持ちが安定していない	c	.642	-.064	.177	.056	.536
気持ちの動揺が激しい	c	.641	-.135	.142	.030	.421
すぐ気持ちがぐじける	c	.633	-.098	.004	.324	.644
気分が沈んでしまってやりきれなくなることがある	c	.627	.055	.018	.035	.482
みじめな思いをすることが多い	c	.614	.035	.153	.075	.596
すぐ自分だけが取り残されているような気分になる	c	.586	.107	.077	.192	.615
自分のことが他人に知られるのではないかとよく気にする	b	.529	.195	.021	-.091	.403
友達が自分を避けているような気がする	b	.494	.041	.258	.033	.501
自分の弱点や欠点を他人に知られるのがこわい	b	.469	.031	-.017	.028	.249
他人に対して申し訳ない気持ちが強い	b	.457	.180	.028	-.005	.364
人の笑い声を聞くと自分の事が笑われているように思う	b	.447	.110	.019	.041	.314
人と話していて自分のせいで場がしらけたように感じることもある	b	.445	.293	-.055	.127	.521
人と話をするとき目をどこへ持って行って良いかわからない	a	.433	.171	.057	.014	.363
何をすることも自信がない	c	.394	.228	-.060	.323	.591
自分のことが皆に知られているような感じがして思うように振る舞えない	b	.385	.326	.071	-.083	.363
人と目が合わせられない	a	.275	.227	.192	-.060	.318
人が大勢いるとうまく会話の中に入っていけない	a	-.078	.989	-.194	.020	.692
多人数の雰囲気になかなかとけこめない	a	-.067	.984	-.109	.040	.793
人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない	a	.068	.803	-.254	-.001	.491
大勢の中で向かい合って話すのが苦手である	a	-.028	.780	-.057	.048	.559
集団の中にとけこめない	a	.027	.746	.073	.115	.768
大勢の友達とワイワイ騒ぐのが好きだ	A	-.287	.675	.193	-.171	.401
人との交際が苦手である	a	.068	.661	.235	-.026	.758
グループで付き合うのが苦手である	a	-.016	.603	.311	-.072	.647
友達数人でいる場面は苦手だ	A	-.118	.535	.365	-.096	.522
人と自然に付き合えない	a	.314	.506	.087	-.027	.630
グループの雰囲気になじめず違和感を抱いてしまう	a	.331	.498	.062	-.036	.605
仲間の中にとけこめない	a	.219	.451	.210	.114	.702
対人関係がぎこちない	a	.287	.440	.142	.054	.632
人前になるとオドオドしてしまう	a	.365	.430	-.123	.030	.445
出来ることなら人とあまり関わりになりたくない	A	-.027	-.074	.845	.049	.644
友達と一緒に食事をするのは好きではない	A	-.117	-.033	.804	.070	.494
他人と親しくなるのはうとうしい	A	-.047	-.022	.746	-.024	.576
できれば食事は一人でとりたい	A	.174	-.201	.728	-.016	.345
人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だ	A	-.135	.061	.652	-.064	.469
昼食は友達と一緒に食べるのが好きである	A	.007	-.099	.639	.023	.294
友達と一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だ	A	.046	-.042	.608	-.033	.386
一人で趣味に没頭していたい	A	-.026	.019	.558	-.052	.348
ものごとに集中できない	c	-.066	.017	-.036	.947	.823
何をやるにも集中できない	c	-.103	.036	-.031	.946	.802
一つのこと集中できない	c	-.068	-.029	.035	.945	.822
根気がなく何事も長続きしない	c	.033	-.075	-.046	.795	.588
因子間相関	2	.65				
	3	.48	.68			
	4	.58	.47	.37		

注1. “原尺度”欄の記号 A：対人退却傾向尺度，a：対人状況における行動，b：関係的自己意識，c：内省的自己意識。

注2. この表に示した行列は、いわゆる因子パターンであり、各要素は当該変数の主成分への標準回帰係数であるため、絶対値が1を超える場合がある。

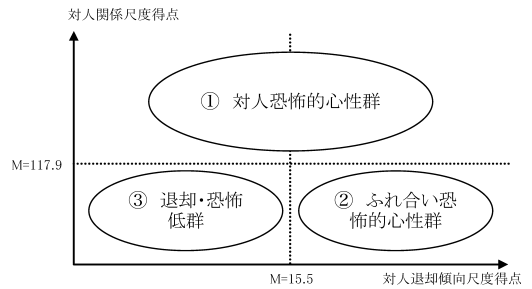
子的まとまりを示すことが確認された。よって、以下の分析ではこの8項目を対人退却傾向尺度としてふれ合い恐怖的心性を測定することとした。対人退却傾向尺度8項目の $\alpha$ 係数は.858であった。なお、対人恐怖的心性の測定には、永井(1994)の知見に沿って対人関係尺度全42項目の総得点を用いることとした。対人関係尺度42項目の $\alpha$ 係数は.969であった。また、対人退却傾向尺度と対人関係尺度との相関係数は $r=.508$  ( $p<.001$ )であり、岡田(2002)と類似した結果が得られた。

**群分けによる一元配置分散分析**

仮説を検証するため、本研究では対象者を“ふれ合い恐怖的心性が高い群”，“対人恐怖的心性が高い群”，“ふれ合い恐怖的心性も対人恐怖的心性も低い群”の3群に分類し、群間での比較を行うこととした。群分けに関して、岡田(1993, 2002)はふれ合い恐怖的心性が高い群、対人恐怖的心性が高い群をクラスター分析によって抽出しているが、本研究では先行研究(永井, 1994；岡田, 1993, 2002)において示されている知見を元に、対人退却傾向尺度得点と対人関係尺度得点の平均値の高低の組み合わせによって対象者を分類した。まず、全体を対人関係尺度得点の平均値 ( $M=117.9$ ) で二分した。このうち、①対人関係尺度得点が高い群を“対人恐怖的心性群”と名付けた。次に、対人関係尺度得点の低い群を、対人退却傾

向の平均値 ( $M=15.5$ ) でさらに二分した。これにより、②対人退却尺度得点が高く対人関係尺度得点が高い群を“ふれ合い恐怖的心性群”，③対人退却尺度得点、対人関係尺度得点の両方がともに低い群を“退却・恐怖低群”と名付けた (Figure 1)。各群の対人退却傾向尺度得点および対人関係尺度得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。

3群間での抑うつおよび自我同一性の感覚の差を検討するために、各群のBDI得点およびMEISの4下位尺度得点(自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性)のそれぞれの平均値について、一元配置分散分析を行った。その結果、全ての変数について有意な主効果を示した ( $F [2, 289]=67.97, p<.001, F [2, 289]=78.84, p<.001, F [2, 289]=29.84, p<.001, F [2, 289]=53.28, p<.001, F [2, 289]=58.02, p<.001$ )。また、全ての変数において有意な主効果がみられ



**Figure 1** 対人退却傾向尺度得点と対人関係尺度得点による群分け

**Table 2** 3群の各尺度の記述統計および一元配置分散分析

	①対人恐怖的心性群	②ふれ合い恐怖的心性群	③退却・恐怖低群	F 値	多重比較
人数	153 名	44 名	95 名		
対人退却傾向尺度	18.6 (7.8)	20.0 (4.4)	8.5 (4.3)		
対人関係尺度	153.0 (24.8)	91.1 (18.4)	73.9 (30.1)		
BDI	13.0 (6.9)	7.0 (5.1)	4.6 (3.5)	$F=67.97^{**}$	②<① **, ③<① **
自己斉一性・連続性	20.4 (5.9)	25.4 (4.6)	29.0 (4.6)	$F=78.84^{**}$	①<②<③ **
対自的同一性	17.0 (5.5)	21.7 (4.6)	22.1 (6.0)	$F=29.84^{**}$	①<② **, ①<③ **
対他的同一性	17.0 (4.8)	20.3 (4.3)	23.3(4.7)	$F=53.28^{**}$	①<② **, ①<③ **, ②<③ *
心理社会的同一性	18.1 (4.4)	23.3 (4.2)	23.9 (4.7)	$F=58.02^{**}$	①<② **, ①<③ **

注. 分散分析については、BDI および MEIS 下位尺度についてのみ行った。括弧内は標準偏差。\* $p<.01$ , \*\* $p<.001$

たことから、多重比較 (Tukey 法) を行った。その結果についても Table 2 に示した。

BDI 得点について、ふれ合い恐怖的心性群は対人恐怖的心性群よりも 0.1% 水準で有意に得点が低く、ふれ合い恐怖的心性群の方が抑うつが低いことが示された。一方、ふれ合い恐怖的心性群と退却・恐怖低群との間では、BDI 得点に有意な差はみられなかった。

自己斉一性・連続性および対他的同一性得点については、いずれもふれ合い恐怖的心性群は対人恐怖的心性群よりも 0.1% 水準で有意に得点が高く、ふれ合い恐怖的心性群の方が自己斉一性・連続性、対他的同一性の感覚が高いことが示された。一方、ふれ合い恐怖的心性群は退却・恐怖低群より自己斉一性・連続性得点では 0.1% 水準で、対他的同一性得点では 1% 水準で有意に得点が低く、ふれ合い恐怖的心性群の方が自己斉一性・連続性、対他的同一性の感覚が低いことが示された。対自的同一性および心理社会的同一性得点については、いずれもふれ合い恐怖的心性群は対人恐怖的心性群よりも 0.1% 水準で有意に得点が高く、ふれ合い恐怖的心性群の方が対自的同一性、心理社会的同一性の感覚が高いことが示された。一方、ふれ合い恐怖的心性群と退却・恐怖低群との間では有意な差はみられなかった。

## 考 察

### 抑うつについて

結果から、ふれ合い恐怖的心性群は対人恐怖的心性群よりも抑うつが低いことが示された。また、ふれ合い恐怖的心性群と退却・恐怖低群との抑うつは同程度であった。これらのことから、ふれ合い恐怖的心性群の抑うつについては本研究の仮説が支持された。

対人恐怖的心性が高い者は、自身の内面や対人関係のことについて深く思い悩み、抑うつも高い状態にあることが従来より指摘されていたが (堀井・小川, 1997)、本研究でもこれと一致する結

果が得られた。一方、ふれ合い恐怖的心性が高い者の抑うつに関する研究はこれまでになされておらず、仮説通りの結果が得られたことは重要な知見であると考えられる。Pyszczynski & Greenberg (1987) や坂本 (1997) は、自己に注意が向きにくい者は、ネガティブな出来事があった後でも自己に注意が向かないために、抑うつが発生しにくい状態にある可能性を指摘しており、本研究のふれ合い恐怖的心性群においても、“自己に注意が向く”傾向が低いために抑うつが低い状態にある可能性が示唆される。しかしながら、ふれ合い恐怖的心性群の抑うつに関して、その他のどのような要因が影響を及ぼしているのかについては本研究の変数のみでは十分な結論を出すことは難しいと考えられる。また、本研究は一時点での調査であるという限界もあるため、今後は、ふれ合い恐怖的心性群の抑うつに関する研究を重ねていく必要があるであろう。

### 自我同一性の感覚について

#### 1. ふれ合い恐怖的心性群と対人恐怖的心性群

結果から、ふれ合い恐怖的心性群は対人恐怖的心性群よりも全ての自我同一性の感覚 (自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性) が高いことが示され、ふれ合い恐怖的心性群の自我同一性の感覚について、対人恐怖的心性群との比較では本研究の仮説は支持されなかった。この結果について、対人恐怖的心性が高い者の中には、“自分がない”と感じる自我同一性拡散状態がみられることが指摘されている (木村, 1983)。また谷 (1997) は、“個”-“関係”の葛藤から生じるアイデンティティ危機が対人恐怖的心性を高める要因となり、対人恐怖的心性の高さは青年期における自我同一性の確立を阻害する要因であると指摘している。本研究の対人恐怖的心性群においては、否定的な自己意識である対人恐怖的心性の高さが自我同一性の感覚に危機を生じさせる要因となっている可能性があると考えられる。このような要因によって、本研究では木

村 (1983) や谷 (1997) の指摘を支持する結果となったのではないかと考えられる。

一方、対人恐怖的心性が低い者の中には、自我同一性の危機を回避しているため、集団の中にある限り不安なく適応している者がいることが指摘されている (木村, 1983)。このような者の特徴は、山田他 (1987) や岡田 (1993) の指摘するふれ合い恐怖的心性の高い者の特徴、すなわち浅い人間関係は上手にこなすことができるというものに類似していると考えられる。また、ふれ合い恐怖的心性の高い者は、内面への関心が低く、親密な対人関係を回避する傾向にあるという指摘がなされている (岡田, 1993, 2002)。これらの指摘から考えれば、ふれ合い恐怖的心性群では、自己への関心や他者への親密性といった青年期の課題から遠ざかっている可能性があると考えられる。また、対人恐怖的心性という否定的な自己意識が低いこと、浅い人間関係の集団にいて安定していることによって、かえって自我同一性の危機が回避されているのではないかと考えられる。そのため、ふれ合い恐怖的心性群では、対人恐怖的心性群よりも高い自我同一性の感覚を保っているのではないかと考えられる。

## 2. ふれ合い恐怖的心性群と退却・恐怖低群

結果から、ふれ合い恐怖的心性群は退却・恐怖低群よりも自己斉一性・連続性および対他者的同一性の感覚が低いことが示され、退却・恐怖低群との比較では本研究の仮説が一部支持された。この結果について、ふれ合い恐怖的心性群と退却・恐怖低群との間には対自的同一性と心理社会的同一性の感覚に差はみられないことから、ふれ合い恐怖的心性群は自分自身の目標や集団適応といった肯定的な自我同一性の感覚を退却・恐怖低群と同程度備えているといえる。この結果は、ふれ合い恐怖的心性の高い者は、集団などにおける表面的な関係では問題を生じないという指摘 (山田他, 1987 ; 岡田, 1993) と一致するものであるといえよう。しかしながら、ふれ合い恐怖的心性群は退

却・恐怖低群よりも自己斉一性・連続性および対他者的同一性の感覚が低いことから、自分があるという感覚が低く、他者から理解されているという感覚が保ちにくい状態にあるといえる。山田他 (1987) や岡田 (1993) は、ふれ合い恐怖的心性の高い者は、内面的なやり取りを伴う対人関係においては困難を生じると指摘しているが、本研究の結果からは、ふれ合い恐怖的心性群では、自我同一性の感覚の一部に不安定さを抱えている可能性が示唆される。

以上のことから考えれば、ふれ合い恐怖的心性群は、退却・恐怖低群と比較した場合、同程度健康な自我同一性の感覚を備えている部分もあるといえる。しかしながら、内面的なやり取りを伴う“自分”を発揮しなければならないような対人関係におかれた場合では、自分自身の不安定な自我同一性や普段は意識されない内的な感情に直面することとなり、“自分がない”、“他者から理解されていると思えない”などの自我同一性の一部に危機が生じるのではないかと考えられる。これらの点が山田他 (1987) や山田 (1989)、岡田 (2002) の指摘するふれ合い恐怖の“未熟さ”の一端として表されるのではないかと推測される。

## 結 論

本研究では、現代の青年期心性といわれる“ふれ合い恐怖的心性”の精神的健康度について、抑うつと自我同一性の側面から検討を行った。ふれ合い恐怖的心性群の精神的健康度について、ふれ合い恐怖的心性群は対人恐怖的心性群と比べて抑うつは低く、高い自我同一性の感覚を保っていることから、精神的にはより健康な一群であるといえる。しかしながら、ふれ合い恐怖的心性群は退却・恐怖低群との比較では、自我同一性の感覚の一部が低い状態にあることが示された。ふれ合い恐怖的心性群は、個として他者と向き合い、内面的な深まりを伴うような対人関係においては自我同一性を保ちにくくなる、という自我同一性の危



機が生じやすくなるであろうことが推測された。そのため、ふれ合い恐怖的心性が高い者に生じる対人場面の問題においては、自我同一性に焦点をあてた援助が有効となるのではないかと考えられる。

しかしながら、ふれ合い恐怖的心性が高い者の自我同一性の問題について、どのような要因が影響しているのかについては本研究の結果からでは十分に検討することはできず、今後検討していく課題であると考えられる。また、本研究では岡田(1993, 2002)の知見を元に、対人退却傾向尺度および対人関係尺度を用いてふれ合い恐怖的心性の高い者を分類したが、これらの尺度にはふれ合い恐怖的心性を持つ者が感じている“困難さの程度”についての内容が十分には含まれていなかった。今後、ふれ合い恐怖的心性を持つ者への臨床的援助について示唆を深めるためには、困難さの程度を測定する内容を含めた尺度を作成し、検討を行っていく必要があると考えられる。

#### 引用文献

- Beck, A. T., Steer, R. A., & Brown, G. K. (1996). *Manual for the Beck Depression Inventory. 2nd ed.* San Antonio, TX: Psychological Cooperation.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle.* New York: W. W. Norton & Company.
- (エリクソン, E. H. 小此木啓吾(訳編)(1973). 自我同一性 誠信書房)
- 福井康之(2001). 新しく出現したタイプを含む対人恐怖の質問紙調査による分類の試み 心理臨床学研究, **19**, 477-488.
- 福井康之(2003). 女子青年のふれあい恐怖と外見恐怖人間性心理学研究, **21**, 187-197.
- 堀井俊章・小川捷之(1997). 対人恐怖的心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.
- 木村法子(1983). 対人恐怖についての一考察——TATに表された自己と他者を通して—— 京都大学教育学部紀要, **29**, 134-144.
- 小嶋雅代・古川壽亮(2003). 日本版BDI-II手引き 日本文化科学社
- 永井 徹(1987). 対人恐怖的心性とパーソナリティに関する研究——ロールシャッハ・テストを中心に——心理測定ジャーナル, **23**, 14-19.
- 永井 徹(1994). 対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析——サイエンス社
- 永井 徹(1998). 対人不安における心理的・認知的アセスメント 季刊精神科診断学, **9**, 479-488.
- 永井 徹・岡田 努(1987). 対人恐怖的心性の構造に関する研究 日本心理学会第51回大会発表論文集, 534.
- 岡田 努(1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, **4**, 162-170.
- 岡田 努(2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, **10**, 69-84.
- Pyszczynski, T., & Greenberg, J. (1987). Self-regulatory perseverance and the depressive self-focusing styles: A self-awareness theory of reactive depression. *Psychological Bulletin* **102**, 122-138.
- 坂本真士(1997). 自己注目と抑うつつ社会心理学 東京大学出版
- 佐藤達彦・野上芳美(1985). ——対人恐怖症の特殊なカタチ・近縁の病態——会食恐怖症 精神科MOOK, **12**, 20-28.
- 清水健司(2001). 青年期における対人恐怖心性と孤独感との関連 心理臨床学研究, **19**, 525-534.
- 清水健司・海塚敏郎(2002). 青年期における対人恐怖的心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54-64.
- 谷 冬彦(1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖的心性 教育心理学研究, **45**, 254-262.
- 谷 冬彦(2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 山田和夫(1989). 境界例の周辺——サブクリニカルな問題性格群—— 季刊精神療法, **15**, 350-360.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子(1987). 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究(第2報)——ふれ合い恐怖(会食恐怖)の本質と家族研究—— 安田生命社会事業団研究助成論文集, **23**, 206-215.

## **Intimacy Avoidance, Depression, and Ego-Identity in Japanese Young Adults**

Ryo ITO<sup>1</sup>, Satomi MURASE<sup>2</sup>, Takahiro YOSHIZUMI<sup>1</sup> and Takashi MURAKAMI<sup>3</sup>

<sup>1</sup>Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

<sup>2</sup>Nagoya University Center for Developmental Clinical Psychology and Psychiatry

<sup>3</sup>Faculty of Sociology, Chukyo University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16, No. 3, 396-405

The purpose of this study was to investigate the relationship between tendency to avoid intimacy and depression and ego-identity in Japanese young adults. Two-hundred ninety-two university students, 125 men and 167 women, completed a questionnaire measuring the tendency to avoid intimacy with others, anthropophobic tendency, and depression and ego-identity. They were divided in data analysis into three groups: intimacy avoiding, anthropophobic, and no phobic/avoidant. ANOVA showed that intimacy avoiders endorsed fewer depressive symptoms and had higher scores on ego-identity than the anthropophobic. It was also shown that intimacy avoiders had lower scores on two ego-identity subscales than those without phobic or avoidant tendency. These results suggested that intimacy avoiders had better mental health than the anthropophobic, although they may be more prone to ego-identity crises in interpersonal relationship than those who were less afraid of intimacy.

**Key words:** avoidance of intimacy, anthropophobic tendency, depression, ego-identity